

やまと 民俗への招待

鹿谷 勲

風呂敷は紙や布の手提げ袋に代わったが、名前は、ますます暮らしに浸透している。人毎にいろいろな風呂の思い出があるだろう。子供の頃、桧風呂に井戸水を汲んで、いくら入れてもなかなか水かさが増えなかつた。風呂の焚き口で、工夫しながら火を焚いたことは今も懐かしい。温度も湯の量も自由に加減できる今の風呂は、昔と比べるとまるで夢のようだが、少し物足りない氣もある。

徳田秋声は、1924(大正13)年に「風呂桶」という短編を書いている。古い先の短さを思い始め

た大所帯の主人公が、銭湯での人との付き合いが年々煩わしくなり、家に湯殿を設け、風呂桶を買う。石炭で風呂を沸かして、銭湯に比べると窮屈な風呂に入り、死ぬまでこの桶一つでいけるどうかと思うと、「それがだんだん自分の棺桶のような気がしてくる」のだ。広々とした銭湯と五右衛門風呂のような内湯、さらに座檻のイメージを交錯させた一編だ。

1937(昭和12)年には、尾崎一雄が「玄関風呂」という短編を書いた。ある日突然、妻が円で近所から中古の風呂桶を買うと言い出した。

「練炭風呂」で、練炭一つ入れておけば、あとは自然に沸き、便利で経



「母子入浴図」(石子順三『小絵馬図譜』より)

追憶の内風呂談議

(奈良民俗文化研究所代表)
次回は7月8日

ことになった。玄関の磨りガラスでは気配が見えるので、張り板(着物の洗い張り用の板)を立てかけ、家族が交代で来客を見張りながら入った。

5、6回玄関でたてて裏庭に移し、床いも設けず露天のまま夜に入るようになした。井伏鱒二に玄関で風呂を焚いていると話したら、「随分たてつけがいいんだね」と言う。

玄関のたたきに水を溜めて風呂を沸かすのだと勘違いしたようだった。二つの作品は、大正終わり頃と昭和一〇年代初め

に、石炭と練炭という新しい燃料を使った内風呂がしやすいに一般家庭に普及し始める頃の風俗を描いた作品だと言える。

和辻哲郎は大正7年5月に友人達と大和の古寺巡りをした。その印象記は『古寺巡礼』として大正8年に刊行されている。

和辻は風呂好きだった

月に友人達と大和の古寺巡りをした。その印象記

は『古寺巡礼』として大

正8年に刊行されてい

る。和辻は風呂好きだっ

たのだろう。西洋の風呂

は事務的で、日本の風呂

は享樂的だとして、東西

の風呂談義を書いている

が、奈良阪の途中で車夫

から初めて「カラ風呂」

の話を聞き、法華寺へ行

った時、そのカラ風呂に突然出逢っている。